

## 第一章 先輩の退職

月の初日、出勤した朝の朝礼で社長から衝撃的な発表を聞く。

「あー。この度、高島さんが寿退社する事になった。今月いっぱいまでは働いてくれる事になるが、引継ぎとうとうをお願いしてある。特に伊藤さんには多くの事を引き継いでもらう事になるから、良く話を聞いてくれ」

うつそ……。一番仲良くしてくれた高島さんが…退職？　ていうかそんな仕事、私に出来る？

一瞬頭が真っ白になる。高島さんの挨拶も耳に入って来ず、私はショックで呆然としていた。

朝礼が終わって給湯室に行くと、高島さんが話しかけてくる。

「ごめんねえ、伊藤さん。実は私の退職にあわせて、伊藤さんが採用になったんだよね。社長がギリギリまで引き留めてたけど、本当は伊藤さんが入社してすぐに伝えたかったんだよ。とにかく引き継いでもらわなきゃならないし、丁寧に教えるからさ」

「私に出来るかなあ。高島さんの仕事…」

「私だって入社して四年くらいだし、大したことしてないから大丈夫」

「でも、高島さんって大卒だし、東京で働いてたんですよ？」

「そんなの関係ないない！　ほんと簡単な仕事だから」

凄く心細くなってくる。しかも高島さんが辞めちゃうことが悲しかった。

なぜかポロポロと涙が出て来る。

「え、泣かないで」

「高島さんが辞めちゃうの寂しいですう！」

すると高島さんも薄っすらと涙目になりながら言う。

「大丈夫。そう言う時の田辺だから。田辺さんにもお願いしておくからさ」

「無理ですう」

「ごめんよお。でも前から決まってた事だから」

ふと寿退社と言っていた事を思い出した。自分の想いばかり告げていては良くない。

「あ、ご結婚おめでとうございます！」

「ありがとうございます！　なんかこの会社のお局さんって独身多いじゃん。だから皆、おめでどうを言ってくれないんだよ」

「怖い」

「怖いよね！　まあ：実は人間関係が退職の大きな理由だったりもするんだけどね」

分かる気がする。年の離れたお局様達は仕事を教えてくれないし、何故か親しく話しかけても来ない。これと言って害を及ぼさないだけ。

「なんか、ちよつとわかります」

「あと、男連中！ 伊藤さんみたいに可愛いとちやはやするけど、私にはあたりがキツイ！ まあ寿退社は本当のことだけど、もう少し環境が違ったらパートでも続けてたかな」

「残ってくださいよ！」

「ごめんね。もう社長に何度も断ってるんだ」

「そうですか……」

そこに他の男性社員が入って来たので、私達は話を切り上げて事務所に戻った。

すっごい落ち込む。優しい高島さんが退社…。

そして業務が始まると、高島さんが私に言う。

「じゃ、引き継ぎ書をプリントしたから会議室に行こっか」

「はい」

そこに専務から声がかかった。

「引継ぎ始めるのか？」

「はい」

すると専務が言う。

「田辺も一緒に引き継ぎしてくれ！」

えっ？ 彼はただでさえ仕事が多いと思うんだけど…。

「わかりました」

そして田辺さんは仕事を中断し、高島さんと私について来た。会議室に入り次第、高島さんが田辺さんに謝る。

「めっちゃすいません！ ガッツリ巻き込まれましたね……」

「まあ、高島さんの退職は聞いてたし、専務からは今月は引継ぎに時間を割いてくれて言われてたから」

「私も退職は、田辺さんにしか言っていなかったですしね」

「さて、始めるか」

高島さんは田辺さんだけを信頼している。それは薄々感じていた。確かにこの人は信頼出来る人で、私もいろんな業務を教わって来た。

半日かけて引継ぎの説明をされ、もう頭がパンクしそう。

午後からは早速、高島さんのお客さん周りをする事になる。お客さん周りをしていくと、高島さんは惜しまれての退職だと分った。明るい性格の高島さんだからこそ、こんなにお客様に信頼されているんだと思う。

それから一カ月。

私もようやく一通りの仕事を頭入れる事が出来た。だけどまだまだ不安で、恐らく田辺さんを頼ってしまう事になるだろう。いやむしろ、田辺さんが居なければ私は多分何も出来ないと思う。とにかく彼を頼って何とか頑張るしかないと思っていた。

明日は高島さんの送別会。商業用バンの中で田辺さんがポツリという。

「高島さんの送別品……どうしたらいいかな」

「あ、私は今日、買いに行くつもりでした」

「そっか。俺どうしようかな？ 困ったな」

「女性への送別品って悩めますよね？」

「悩む」

整った顔の眉間にしわを寄せ、田辺さんが考え込んでいた。

「じゃあ、一緒に買いに行きますか？」

「いいのか？」

「はい」

普段めちゃくちゃお世話になっているので、このくらいの事はしなくちゃと思う。私は田辺さんに個人のラインアカウントを教えた。

残業をせずに退社し、私と田辺さんはショッピングセンターに来ていた。ひとまず田辺さんの車に乗って、何を買うかの話し合いをする。そこで話になったのは、二人の連名でプレゼントをすれば結構高額なものが買えるという事だった。そして決まったのはヘッドスパのペア

チケット。ヘッドスパの店に行ってチケットを購入して車に戻って来る。

「喜んでくれるといいですねえ」

「きっと普段なかないかないし、喜んでくれるんじゃないか？」

「ですよ」

「ところで、ヘッドスパってどんな事するんだ？」

仕事のできる田辺さんの発言とは思えず笑ってしまう。

「ふふ。分からないで買ったんですか？ 頭のマッサージです」

「気持ちいいのか？」

「いいですよ。髪質もよくなります」

「いいなあ。俺もしてもらいたいくらいだ」

「いつも忙しそうですもんね」

「業務が俺に集中しすぎる」

「…すみません」

「あ。気にするな。伊藤さんの業務はそんなに大変じゃない…。あの、馬鹿にしている訳じゃないぞ」

「わかってます」

でもすつごく仕事が詰まっているのは知ってる。それなのに私の能力が低いせいで、彼におんぶに抱っこしていた。

田辺さんが大きく伸びをして言う。

「さーて！ 帰るか！ 明日もあるしな」

なんだが申し訳なくなってきた。

「あ。じゃあ帰る前に、私が田辺さんをマッサージします！ 私、マッサージ得意なんですよ！」

「マッサージ？ いいっていいって。伊藤さんも忙しいんだから」

「全然です！ やります！」

「いや…めっちゃ魅力的な提案だけど、こんなところ？」

「確かに……」

平日とはいえ周りには買い物客も居て、こんなところでマッサージなんかしてるのはおかしいかも。すると田辺さんが言う。

「屋上駐車場に移っていいか？」

「あ！ はい！」

そして田辺さんが車を移動させ、ショッピングセンターの屋上駐車場の角に車を停めた。

「案外見晴らし良いな」

「ですね」

「どうすればいい？」

「じゃあ後部座席に座ってください」

二人で後部座席に座って、私が田辺さんに上着を脱いで背中を向けてくれるように言う。

ワイシャツ姿になった田辺さんが、私に背を向けたので肩に手を当てて揉む。

うっわ。硬った！

「こりこりですね」

「もう、ボキボキ言う」

私はトントンしたり揉んだりして、田辺さんの肩の凝りをほぐして行った。

「気持ちいい…口を閉じ忘れてよだれが出そうになる」

「うふふ。少しは柔らかくなってきたと思います」

すると突然、田辺さんが振り向いて言う。

「お返しにマッサージさせて」

「えっ、いいですいいです！」

「いいから。上着脱いで」

強引に言われて、私は言われるままに上着を脱いで田辺さんに背を向けた。

するりと肩に手を置かれゆっくりと揉まれる。

「あ、気持ちいいです」

痛くもなく弱くもなく丁度良い強さ。私の方こそよだれが出ちゃいそうになる。

「高島さんが居なくなっちゃうの寂しいよな」

田辺さんもそう思ってたんだ。ドライっぱいからなんにも思ってたのかと思った。

「寂しいです。本当に優しい人でした」

思い出すだけで悲しくなっちゃう。少し涙を浮かべていると、唐突に田辺さんが後ろからハグして来た。

えっ！ ええ！

どうしよう…。

私は冷静になって考える。自分は仕事が出来ないし、田辺さんがいないとやっていけないと思う。そんな彼に抱きつかれてしまうと、無理に振りほどけない。

……ここで陰悪なムードにもなりたくないなあ……。

私は回された腕をぎゅつとしてしまった。しばらくそうしていると、田辺さんは私を振り向かせた。

「伊藤さんは辞めないよな？」

「辞める予定はないです」

何だが不安げな田辺さんの表情にキュンとしてしまった。

なぜか私はその勢いのまま、田辺さんの胸に体を預けてしまった。

すると田辺さんが言う。

「おれ十歳ぐらい上なんだが……」

「知ってます」

その言葉を聞いた田辺さんは、私の顔をまじまじと見て言った。

「会社のみんなが言うとおりだな」

「えっと」

「確かに可愛い」

「あの、ありがとうございます」

そしてゆっくりと顔が近づいて来たので、私は目をつぶった。

ちゅっ♡

優しいキスをされて何故か嬉しかった。仕事で頼り切っている田辺さんの役に立ちたいと思ってしまう。

「あの。私、仕事出来ないですけど、田辺さんがしてほしい事ありますか？」

「してほしい事？ っていうより、してやりたい事ならある」

「なんです？」

「伊藤さんに触れたい」

「……」

言っている事は分かる。私は目の前の田辺さんにしか頼れない状況。だがもう少し考えてから答える。

「好きに触ってもいいですよ」

「本当にか？」

「はい」

田辺さんはまた私に近づき、唇を重ねて来る。ちろちろと唇を舐められたので私は口を開いた。

ぬるっと田辺さんの舌が入ってきて、私の舌に絡んでくる。

ちゅぶ♡ちゅば♡

じつくりと絡みつく舌の感触が心地よかった。ディープキスをしながら、田辺さんの手が私の太ももに置かれた。配達などもあるので黒のスキニーパンツをはいているが、田辺さんの手が内ももを滑って股間に上がって来る。

そこで少し冷静な私が言う。

「見られませんかね」

「大丈夫、後部座席と後ろはスモークガラスだから」

なるほど…確かに前面は景色が広がっているが、後ろからは見えない場所に車が置いてあった。

またキスを始めた田辺さんは、太ももの手を更に進めて私の股間に触れる。スキニーパンツをはいているとはいえ、田辺さんの指の感触はハッキリと分かった。さすさすと股間をまさぐられて、少し恥ずかしくなってきた。

「あの。恥ずかしいです」

「だって、好きにしていって……」

「あ、もちろん！ あの、田辺さんのしたいようにしていいです」

「本当か？」

本当かと聞かれると…気持ちがぐらつくけど、私は田辺さんが居てもらわないと困る。

「はい」

すると田辺さんは、私のウエストのベルトに手をかけた。

「あつ」

「ダメか？」

「……いいです」

カチャカチャを音をたててベルトが外され、スキニーパンツの前のボタンも外されてしまう。

ジーっとジッパ―が下ろされた。